角地建築物の構えからみた建築類型と断片的都市形態の関係

THE RELATIONSHIP BETWEEN BUILDING TYPOLOGY
AND URBAN FRAGMENTAL MORPHOLOGY
VIEWD FROM BUILDING FRONT OF CORNER BUILDING

藤村 龍至*, 佐々木 啓**, 塚本 由晴***

Ryuji FUJIMURA, Kei SASAKI and Yoshiharu TSUKAMOTO

In this paper, the relationship between building typology and fragmental urban morphology viewed from building front of corner as a common condition covered over Shimo-kitazawa is clarified in order to find out the physical order of the district well known for its complexed and intimate atmosphere. In the first half part, the typology of the corner buildings is led by considering the relationship between building element and volume, and the way how the buildings respond to the corner is clarified. In the latter half part, the combinations of the corner buildings' type are examined in each corner. As a result, it does not seem that the same type of corner buildings stand next each other, however, linguistic rules such as elements and volumes shared by corner buildings in the district work better to know the relationship between buildings and urban morphologies in contemporary fluid urban context.

Keywords: Coexistence Area of Residence and Commerce, Corner, Corner Site, Corner Site Unit,*Building Front, Fragmental Urban Morphology*

住商混在地域, 角, 角地, 角地ユニット, 構え, 断片的都市形態

1.1 序 研究の背景 建築類型と断片的都市形態の関係

わが国においては、建築物はひとつの敷地においてひとつずつ建築されることが原則とされ、街区や地区、街並、都市など、より大きな単位で認識される秩序よりも、建築主の自由が優先されてきた。加えて、高度経済成長後の社会の成熟化に伴う価値観の多様化、経済的な競争の激化に伴う高度利用化、防災や安全に対する関心の高まりに伴う重装備化など、建築を取り巻く様々な社会的な要請によって、規模の大小に関わらず、用途の違いにも拘らず、無数の独立型建築物が個別の状況に応じて新築や改築を繰り返す状況がもたらされ、その蓄積は、多様な年代の建築物がランドムに並ぶ独特の都市空間を発達させてきた。

80年代以降、「都市再生」を掲げた諸政策が世界各地で同時進行するなかで、わが国においても積極的な規制緩和策の導入により、島状の大規模再開発が続々と展開され、それぞれの開発区域での都市デザインが試みられてきたが、ひとたび区域外との関係に注目すると、その圧倒的な規模の違いや、建築主体の不連続性によって、都市風景の断片化がますます加速され、都市形態と呼べるよ

うな集合的な秩序は見いだしにくくなっている。しかし、建築の個々の創作の論理的背景として、都市形態と呼べる何かを指定しないことには、公共に還元しうる継続的な建築創作のあり方を考えられないのではないか。

その際、ヨーロッパの諸都市にみられるような街路型の集合住宅が形成するブロックといった建築類型と都市形態の明快な関係性をわが国の都市空間において見いだすことは難しいが、一見雑多に見える独立型建築物の集合による街並がみられる東京においても、建築物に働く外的、内的な要因に注目し、複数の建築物の反復に注目すれば、建築物の集合パタンのなかに都市形態と呼べる形式性を見いだせる潜在的な可能性を期待できると考えられる。

わが国では20世紀を通じて、一方で建築スケールでの建築物の個性性を維持しながら、他方で都市スケールでの都市形態の連続性、一体性を評価するような、建築物と都市形態を互いに比較可能にする共通の建築言語の体系が見いだされてこなかったため、昨今の大規模な都市再開発が社会的な関心を集める一方、生活者にとっての「空間」の質についての議論よりも、都市再生という「政

* 東京工業大学大学院 博士課程・修士(工学)

** 東京工業大学大学院 修士課程

*** 東京工業大学大学院 准教授・博士(工学)

Graduate Student, Graduate School, Tokyo Institute of Technology, M. Eng.

Graduate Student, Graduate School, Tokyo Institute of Technology

Assoc. Prof., Graduate School, Tokyo Institute of Technology, Dr. Eng.

策」が先行する状況に歯止めを掛けることができなかった。そのような背景においては、建築と都市の双方を捉え直す共通の批評軸を見だし、新たな価値を創出することが21世紀の課題であるといえる。

1.2 研究の対象と目的

以上のような問題意識に基づき、本研究では、複数の独立型建築物の反復によって現れる断片的な都市形態（以下、断片的都市形態）のあり方を捉えていく。そこでは、独立型店舗によって日本の都市の原則である個性性は共有されているが、それを前提に、商店建築物は住宅と異なり、購買客を引き寄せるための原則である共同性もまた共有されている。

近年小田急電鉄の立体交差化事業（高架化）と大型道路「補助54号線」の事業認可によって大規模な再開発が計画されており、社会的な関心を集めている世田谷区下北沢地区は、東京の代表的な住商混在地域のひとつである。区画整理等の都市整備がなされていないために細かな街路が網目状に広がり、それゆえに住宅スケールの建築物と多くの種類の角が存在する独特の都市空間を形成しており、開発計画により非常に流動的な状況ではあるが、ここでは同地区を建築類型と断片的都市形態の関係を考察する対象として設定する。

ここでは、下北沢地区の都市空間の特徴を形成していると思われる角、およびそれに面する敷地である角地に注目した。角地という条件下での同一の要素に注目することによって、建築物のふるまいを問題にしようとするためである。まず、茶沢通り等住宅地との境界となっている街路によって囲まれた範囲（図1）を対象とし、そのなかから複数の街路が交差または分岐する角を抽出したところ、130の事例が得られた。また、角地に面して建つ建築物（以下、角地建築物）が同地区においては446棟みられ、全建築物（1136棟）の39.2%を占めていることから、ここでは角地建築物の集合が都市空間に対して構成上の重要な要素となっていると捉えられる。角地建築物には一辺で接するもの（118）と二辺で接するもの（328）がみられるが、本研究では角に特徴的な構えをつくる二辺で接道するものを対象とし、さらに住宅等で塀を持ち、街路から直接建物内にアクセスできないものや、空地を除いた215棟の角地建築物を対象とする。

合流する街路の数から角の種類を検討すると、2つの街路が交差するL字角（6）から順に、三叉路（79）、四つ角（19）、五叉路（1）、六叉路（1）、がみられた（表1）。これらは複数の街路が一点で合流するものであるが、合流する点がずれる変形（24）もみられた。下北沢地区においては三叉路が最も多く、全体の60.8%（79/130）を占めている。角地建築物を生む外的な要因としては、東京の高密度な土地利用による影響が大きいと考えられるものの、内的な要因として、引きを取って独立して建つ住宅とは異なり、商店が購買客を引き寄せるため1階が「接道する」という与件が内的要因として大きく働いており、それらの外的要因と内的要因の相乗が角地

表1 角の種類

L字角 (6)	三叉路 (79)	四つ角 (19)	五叉路 (1)	六叉路 (1)	変形 (24)

図1 対象範囲

図2 分析例

表2 建築物のヴォリューム

出隅(95)	曲面(12)	隅切(65)	入隅(13)	欠取(17)	基壇(13)

表3 要素の配列

位置	角	面
	点在（角に要素あり）(23:31)	連続 (71:39)
	連続 (71:39)	点在（角に要素なし）(117:135)
種類		

*表註1：0内は各層においての事例数を示す(地上階:2階以上)。
*表註2：要素がみられないものはなし(1:7)とした。

表4 偏りをもつ要素の配列

点在（角に要素あり）* (11:23)	連続* (97:62)	点在（角に要素なし）* (19:15)

表5 要素の配列の組合せ

角に要素あり			角に要素なし
点在のみ (28)	連続のみ (64)	複合 (11)	点在のみ (110)
点在(角) - 点在(角)	連続-連続	独立-連続	点在-点在
点在-点在(角)	連続-点在		

建築物の構えに集中的に現れていると考えられる。ここではまず、角への対応からみた角地建築物の構えの構成を明らかにする。

さらに、それらの角とそれに面する角地建築物相互の関係に注目し、同一の角に面する複数の角地建築物の集合を「角地ユニット」と定義すれば、「ふたつの街路に面する」という共通した物理的条件に対する複数の建築物の構えを比較することができ、そこには、小さいながらも単体では成立しない関係的な空間を成立させていると捉えることができる。本研究では、下北沢地区に定めた対象範囲のうち、130の角に面する角地ユニットのうち、住宅のみで構成されるものを除く97の角地ユニットを対象とする。

以上より本研究では、角地建築物という特定の建築類型と、角という特定の都市の物理的条件との対応関係を観察し、角地建築物の構えを分析することによって、建築類型と断片的都市形態²⁾の関係の一端を明らかにすることを目的とする。

1.3 既往研究との関係と研究の概要

ここで、これまでになされてきた建築類型と断片的都市形態との関係に関する研究を概観すると、国内外の特定の地域の伝統的な住宅を対象にし、住居の類型と街区の形態の関係を論じたもの¹⁾、建築ヴォリュームと周辺環境等街区スケールにおける建築の集合の形式を論じたもの²⁾などがみられた。これらの研究では実測等によって得られた平面図、住宅地図等を資料とし、室やヴォリュームの配列などを分析の手段として構成類型を抽出し、その結果を生活様式や気候風土等の社会的、物理的背景と結びつけた論証などがなされているが、本研究のように都市的な環境に建つ建築物を対象とし、角など都市空間に現れる特定の形態を物理的条件と捉え、両者の関係を論じるという視点はみられない。

本研究ではまず前半部分において、都市形態の構成要素としての角への対応からみた角地建築物の構えの構成要素を明らかにし、そこで明らかとなった分析格子を用いて、角地建築物の構えの類型を導く。そして後半部分において、下北沢地区の全ての角における角地建築物の集合の仕方を検討し、そこにおける角地建築物の類型を比較することによって、建築類型と断片的都市形態の間に共有されている言語的な規範性のありようを検証するものとする。

2.1 角地建築物の構えの構成

以上のような概要に従い、ここではまず、角への対応からみた角地建築物の構えの構成を明らかにする。分析例(図2)の角地建築物における角への対応をみると、まず建築物全体のヴォリューム形状が隅切りされており、また1階店舗の入口は隅切りされてできた面に設けられている。さらに地上階の大きな開口は片側の道路面のみ設けられていることがわかる。このように角に対するヴォリュームの扱い、および開口や看板といった要素の配列においては、角ゆえに生じる「二面に接する」という性質(二面性)と、道路との接続ゆえに必然的に現れる「地上階／2階以上」という分節(二層性)が構成上の境界条件となることがわかる。そこで、これらの性質に注意ながら、建築物全体のヴォリューム形状と要素の配列についての検討を全資料について行い、同一条件下での共通した共通した各建築要素のふるまいに注目する。

建築物全体のヴォリューム形状を検討した結果、角への対応としては、交差点に向かって建物の角を出す出隅(95)、角をつくら

ず曲面でつなぐ曲面(12)、隅切りによって角に面をつくる隅切(65)角に入隅部分を設ける入隅(13)、角部の地上階のみセットバックを行う欠取(17)、2階以上のヴォリュームがセットバックする基壇(13)がみられた(表2)。下北沢地区においては、角に対して積極的に関係づける出隅、および隅切が多くを占め、角に対して距離を取る入隅や、上下階への縦動線を集約する欠取や、二面性よりも二層性を強調し、上下階をはっきりと分節する基壇はあまりみられず、住宅スケールの小規模な商店建築物においても、地上階と道路との接続が最も重要視されていることがわかる。

次に開口部およびそれと同等の大きさをもつ看板といった要素の配列を、角への対応を中心に検討した結果、要素の配列が角を中心にして展開されるものと、面を中心にして展開されるものがみられた(表3)。前者については、看板のように角に独立した要素が配列される点(角に要素あり)、水平連窓のように要素が角をまたぐように連続的に配列される連続、後者については各面に要素が点的に配列される点(角に要素なし)がみられた。地上階および2階以上の事例数をみると、点(角に要素あり)および点(角に要素なし)については大きな偏りはみられないのに対し、連続は地上階に大きく偏っており、地上階における開口の連続性が商店建築物の構えとして重要であることがわかる。

さらに、各層でのそれらの要素の配列には面毎に偏りがみられ、それらの組み合わせより、角に点のみがある点(角に要素あり)のみ(28)、連続のみがある連続のみ(64)、独立と連続の両方がある複合(11)、角には要素がない点(角に要素なし)のみ(110)がみられた(表4)。下北沢の角地建築物のうち、角に要素があるものとならないものはほぼ半数ずつであり、角を強調する構えを構成する点(角に要素あり)のみは全体の13.1%にとどまった。

2.2 角地建築の構えの類型

以上の検討を踏まえ、出隅、曲面、隅切、入隅、欠取、基壇といったヴォリューム形状と、独立、連続、複合、点といった要素の配列の組み合わせを各層で検討する。そのなかから、比較的事例が多くみられ、共通の特徴を持つ14の構えの類型を導いた(表5)。

ヴォリューム形状をもとに順に追っていくと、まず出隅には各階で角をまたぐ要素をもつAと地上階でのみ角をまたぐBがある。Bは人通りのある地上階に対して角を含めた大きな開口をもち、階によって要素の配列の種類が異なる。出隅の各面に要素が点在するCは下北沢において最も多くみられた構えであり(72/215)、角に対してというよりは、側面の二つの街路に対してより強く対応するものである。

曲面に対して水平連窓をもつDは、角を一枚の面が曲げられたもののように扱うヴォリュームの性格に、水平連窓が加わることでより水平方向の連続性を強調する構えである。特に曲面では角をまたぐ要素をもつ構えが多くみられた(10/12)。

隅切には、角が隅切りされることでできる角の面に対して、入口や看板を設けるE、角の面をまたぐ要素をもつF、G、看板や開口を地上階では角をまたぐように、2階以上では角にもつH、要素をもたないIがある。Eは隅切がつくる角の面に対して、各面から独立した要素を重ねることで、角の垂直性をより強調する構えであるのに対し、Fでは要素が角をまたぐことで垂直性を弱めている。Iは角の面に対して要素をもたないことで垂直性を保つものである。

G、HはB同様地上階に対して、角を含めてより大きな開口や看板をもつもので、特にHではさらに上階に看板を設けており、角に対する複数の応答が重なるものである。このように、隅切は曲面における連続のように特定の要素の配列と強い結びつきはみられず、最も多くの構えのヴァリエーションを生み出すヴォリュームであることがわかる。

そのほか、入隅にはI同様角の面に対して要素が配列されず各面に点在するJがみられ、欠取に対しては欠き取られた部分に入口や開口が集中するKと、各面に開口が点在するLがあり、基壇には、街路の形状に合うように突出した地上階のヴォリュームに対して、角を含めた開口をもつMと角に要素をもたないNがみられた。

このように、角地建築の構えには角を各面から独立して扱う構え(EIJKL)と、角を水平方向の連続の一部として扱う構え(ABDM)、これら両方の性格をもつ構え(FGH)、また角には対応せず面する街路に対してのみ対応する構え(CN)がみられた。さらに角を独立して扱う構えには、ヴォリュームがつくる角の単位に要素が配列されることで独立性を強調するもの(EK)と、ヴォリュームのみにより独立性を強調するもの(IJL)があり、同様に水平方向の連続性を強調する構えには、ヴォリュームと要素の配列が組み合わせることで連続性が強調されるもの(D)と、要素の配列のみにより強調されるもの(ABM)に整理できる。また、両方の性格をもつものは、これらの互いに相反する性格をもったヴォリュームと要素の配列が組み合わせることで構えが構成されている。

以上、ここでは住商混在地域である世田谷区下北沢における角地建築物を対象に、それらの構えをヴォリュームと要素の配列の組み合わせとして捉えることにより14の類型を導いた。その特徴として、角地建築の構えには角の独立性を強調するものと、水平方向の連続性を強調するもの、その両方の性格をもつものがみられることを明らかにした。

3.1 特徴的な角地ユニット

以上により、角地建築物の構えからそこにみられる建築類型を定義したが、ここでは前章で定義した角地ユニットを単位とし、それぞれの角地建築物の構えの類型を検討することで、角地建築物の類型とそれらの都市空間への現れとの対応を検討する。

全97の角地ユニットにおける角地建築物の類型を比較すると、同じ角地ユニット内に同じヴォリュームや要素の配列が反復するといった特徴的な事例がみられた。以下それらを順に示す(図3)。

三叉路である北-12の角地ユニットの2棟の角地建築をみると、ともに隅切りされたヴォリュームの角に店舗の入口を設け、2階以上では開口が角にはなく各面に点在している。また道幅の広い方の街路に対して大きな開口をとることで、どちらも一方の面に偏りのある構えをつくっており、ここでは角に対するヴォリューム、要素の配列それぞれの対応がともに一致した、同じ構えが反復することで角地ユニットが形成されている。

北-31の2棟では、開口部や看板の位置は異なるものの、ともに地上階で角のヴォリュームが欠き取られており、ヴォリュームによる角への対応が揃うことで、角にひとまとまりの空間をつくりだしている。

南-14の角地ユニットではともに地上階で角をまたぐように看板があり、2階以上では開口が各面に点在することから要素の配列に

表5 角地建築の構えの類型

ヴォリューム 要素の配列		分節なし				分節あり	
		出隅	曲面	隅切	入隅	欠取	基壇
28	独立		曲01	隅01	入01	欠01	
	地上階でのみ独立			隅01'		欠01'	
39	連続	出01	曲02	隅03		欠03	
	2階以上で角をまたぐ	出01'	曲02'	隅03'			
64	重複		曲04'	隅05			
	上下階で要素の配列が異なる			隅05'			
110	角に要素あり	出03	曲03	隅04	入03'		基01
	地上階でのみ角をまたぐ	出03'	曲03'	隅04'			
110	角に要素なし	出04		隅06	入04	欠04	基02'
	点	出04'		隅06'	入04'	欠04'	

表註1)マトリクス内の上段に偏りのない構えを、下段に偏りのある構えの事例を図示する。
表註2)表中の数字は事例数を示し、[]内はそれぞれ偏りのないもの/あるものを示す。

よる角への対応が一致しており、2棟の差はヴォリュームによる角の扱いのみである。

また4棟で構成される角地ユニットをみると、4棟全てで同じ構えが反復する角地ユニットはみられなかったが、北-33では、4棟の角地建築のヴォリュームが全て隅切りされており、角地ユニット内でヴォリュームによる角への対応が共通している。

また、北-9の角地ユニットでは、道幅の広い街路と平行に隣り合う2棟が同じヴォリュームをもちつつ、地上階での要素の配列は4棟で統一されている。曲面のヴォリュームをもつあ、いでは各面と一体化するように開口部が連続する中で、角に入口を設け、う、えでは各面に開口をもち、それをつなげるように角をまたいだ一体的な看板がある。いずれも道幅の差によらず各面を同等に扱いながらヴォリュームが2棟ずつ揃うことで、道幅の広い街路をはさんで対比的な関係をつくっている。ここでは2棟ずつでヴォリュームが揃い、3棟で要素の配列が揃うといったように複数の水準で角への対応が一致している。

北-11の角地ユニットでは、道幅の広い街路に対して、あ、いがともに偏りのある構えをつくるのに対し、う、えでは上下階で角をまたぐ開口をもち、二辺に対する偏りが少なく、北-9同様街路を挟んで対比的な関係をつくっているといえる。さらに北-11は合流する街路の点がずれており、これに対しては、う、えが面する角に対して隅切りのできる面に看板を設けることで応答している。

3.2 角地ユニットと構えの対応関係

以上、同じ角地ユニットのなかでヴォリュームおよび要素の配列による角への部分的な応答の一致が見られる角地ユニットが全体に占める割合を検討したところ(表7)、そのような一致がみられる角地ユニットは全体のうち28.8%(28/97)で、さらに構えの類型が一致するものは5.1%(5/97)にとどまった(表8)。多くの角地ユニットは北-41に見られるように、角に対して異なる構えをとるものが隣接するものである(図4)。このことから、各角地ユニット内では特定の角地建築物の類型が隣接することはまれであり、下北沢の都市空間の特徴である角地建築物の集合においては、配列による秩序を見いだすことができないということが明らかになった。それは角地建築物としての類型は成立するが、それらを用いて角地ユニットの類型を導くことはできないということである。すなわち、角地建築物の類型どうしの自由な組み合わせとして角地ユニットを捉えれば、それらの集合となる断片的都市形態からなる都市空間の様相は角地の数だけヴァリエーションを増やしていくようなものとして捉えられる。

4 結論と考察

以上本研究では、同一スケールの住宅が並ぶ住宅地のなかに商店建築物が分散的に混在する状況に注目し、住商混在地域である世田谷区下北沢の角地建築物215棟を対象に、それらの構えを建築物のヴォリュームと要素の配列の組み合わせとして捉えることにより14の類型を導き、その構成的特徴を明らかにした。次に後半部分において、それぞれの角における角地建築物の集合である角地ユニットを単位とし、97の角地ユニットに集められた角地建築物の類型を比較検討することで、角地建築物の都市空間への現れ方や、それらの相互関係を検討した。

図3 特徴的な角地ユニット

表7 角地ユニットと構えの対応関係

三叉路			
	同じ類型が揃う	ボリュームが揃う	要素の配列が揃う
2棟で一致	北-6 /C-出04' 北-32/C-出04' 東-9 /C-出04' 北-12/E-隅02' 南-13/F-隅03'	北-2 /出隅 北-54 /出隅 南-3 /出隅 南-10 /出隅 南-53 /出隅 北-46 /隅切 南-17 /隅切 北-31 /欠取	南-12 /独立-点在 南-14 /連続-点在 東-12 /点在-点在
四つ角・変形			
	同じ類型が揃う	ボリュームが揃う	要素の配列が揃う
4棟で一致		東-10 /出隅 北-33 /隅切 北-3 /出隅
3棟で一致	北-8 /N-基02 南-40/C-出04' 東-10/C-出04'	南-6 /出隅 西-1 /出隅 南-2 /隅切 南-7 /隅切 北-11 /隅切	北-9 /連続-連続
2棟ずつで一致		北-9 /曲面-出隅

表注) 三叉路、四つ角、組合せ以外の角地ユニットでは構えの一致はみられなかった。

表8 構えの一致がみられる角地ユニット

同じ構えが反復する角地ユニット	5/97
複数の建物で構えの一致がある角地ユニット	28/97

図4 異なる構えがならぶ角地ユニット

その結果、角地ユニットにおいて同じ建築物の類型が隣接することはまれであり、下北沢に視覚的統一性や連続性を見ることはできないことが明らかとなった。

しかし、冒頭で述べたように住宅と商店建築物が混在し、区画整理等の都市整備が行われなかったが故に多くの種類の角が見られる下北沢においては、全体を一望して得られるような視覚的な秩序、統一性は感じられないが、一定の時間歩き回ることによって得られるような体験的な秩序は感じられる。本研究ではそのような秩序を、1階や角の扱いなど、部分の取り扱いの方法の共通性に基づく言語的な規範性として位置づけた。その前提として、接地階の開口と非接地階の大きな差のある商慣習の一部として角地建築物に共有されている二面性、二層性を、要素の配列やヴォリュームの分節などによる建築物のふるまいを一定の範囲に収める働きをするものとして位置づけた。

このように、建築類型と断片的都市形態の関係を検討することによって、視覚的秩序が簡単に捉えられず流動的と言われる東京のような都市環境においては、均質性や様式的統一性によって建築物の集合を捉えることはあまり有効とは言えず、むしろ特定の場所や特定の種類の建築物に固有の建築の形式言語を仮想する方が、建築と都市の双方を読解・構築する上で有効であるとの認識を得ることができた。この認識に基づいて、今後さらに場所の固有性を建築の言語の水準において再構築する可能性についても検討を加えていくこととしたい。

注

注1) 本研究は、藤村龍至、佐々木啓、塚本由晴ほか：「角地建築の構え 構えからみた下北沢における角地建築の類型(1)」「角地ユニットからみた都市空間の性格 構えからみた下北沢における角地建築の類型(2)」, 2007年度日本建築学会学術講演会における発表論文(梗概集F-2, pp.717-720)として一部報告したものを、改めてまとめたものである。

注2) ここでいう「断片的都市形態」の定義とは、直交グリッドではない交差点の反復のなかに位置づけられる「角の種類と集合の仕方」のことである。

参考文献

- 1) 山田協太, 前田昌弘, 村上和, 布野修司: 「ヴォルフエンダール(コロンボ, スリランカ)の街区構成と住居類型」日本建築学会計画系論文集 No.607, pp.71-78, 2006.9
- 2) 美濃部幸郎, 坂本一成, 寺内美紀子: 「周辺環境との隣接関係からみた都市建築の統合形式: ヴォリュームの配列による現代建築の統合形式に関する研究」日本建築学会計画系論文集 No.558, pp.137-144, 2002.8

(2007年9月10日原稿受理, 2008年4月25日採用決定)